

二陸の文章観

佐藤利行

西晉の陸雲(二六―三〇三)が、その晩年に、兄の陸機(二六一―三〇三)に與えた書翰「與兄平原書」三十數首は、主に文章制作について述べられたものであり、二陸の、文章を作る上での様々な意見、文章そのものについての考えなどが詳細に語られている。そうして、この書翰に記されている文章制作の實態、すなわち用語・造句・押韻・文章構成などといった點を見てゆく時、そこには二人の抱いていた特色ある文章観が鮮やかに浮き彫りにされている。以下、この「與兄平原書」を中心に、さらにそこで問題にされている二人の作品を通して、主として表現面に關わる「清」と、内容面に關わる「情」とについて、二陸の文章観を見てゆきたいと思う。このように考察することによつて、二陸の文章観があらまし把握でき、さらにその二陸の文章観の、六朝文學批評史の中での位置づけが可能になると考える。

二陸の文章観を考察するに當り、先ず注目されるのは、陸雲の文章観の中で「清」ということが大きな位置を占めていたのではないかということである。というのも、陸雲は「與兄平原書」の中で、兄機をはじめ、他の文人の作品に批評を加える際に、次に擧げるが如く「清」

のつく言葉を多用しているからである。

○省「述思賦」、流深情至言、實爲清妙。(第八首)

○「弔蔡君」、清妙不可言。(第九首)

○「漏賦」、可謂清工。(第二十五首)

○「丞相贊」云、披結散紛辭中原、不清利。(第九首)

○兄「丞相箴」小多、不如「女史」清約耳。(第二十一首)

此の他にも、「清美」(第十一首)「清絶」(第十三首)「清新」(第十一首)などが見え、合わせて十二回の用例を数えることができる。

また陸雲は、「清」なる文章について、次のように述べている。

雲今意視文、乃好清省、欲無以尙。意之至此、乃出自然。張公在者必罷、必復以此見調。(第十一首)

雲は今、意に文を視るに、乃ち清省を好み、以て尙ふること無からんと欲す。意の此に至るや、乃ち自然に出づ。張公在せば、必ず罷めんも、必ず復た此を以て調められん。

すなわち陸雲は、「清省」なる文章を理想としており、「清省」ということ、言い換えれば、簡約で無駄の無いことに心がけておれば、自然な文章ができるのであり、もし張華が生きていたならば、そのような文章を否定するであろうが、同時にまた、その故にこそ認められるで

あろう、と言う。

このように、陸雲は「清」なる文章を主張するのであるが、この「清」の内容について、以下、具體的に見てゆくことにする。

(1) 文章の長さについて

陸雲は、一篇の文章の長さについて、あまり長くしない方がよいと考えて、次のように述べている。

有作文唯尚多。而家多猪羊之徒、作「蟬賦」二千餘言、「隱士賦」三千餘言。既無藻偉體、都自不似事。文章實自不當多。(第二十一首) 文を作るは唯だ多きを尚ぶのみなるもの有り。而して家に猪羊多き(を尚ぶ)の徒は、「蟬の賦」二千餘言、「隱士の賦」三千餘言を作る。既に藻偉の體無く、都自て事に似ず。文章は實自に當に多かるべからず。

文章はただ長ければよいという文章家が多く、二千字・三千字もある文章を作っている。こうなると「藻偉」すなわち、文章の美しさ見事さが無くなるばかりでなく、描こうとする事物が描かれていないものになつてしまう。文章は本當に長くないのがよいのである、と言う。そうして、兄機の文章が長すぎることに對しても、いくらか遠慮はしながらも、たびたび不満をもらしている。

「二祖頌」、甚爲高偉。雲作雖時有一佳語、見兄作、又欲成貧儉家。無緣當致兄此謙辭、又雲亦復不以苟自退耳。然意故復謂之微多。「民不輟歎」一句、謂可省。(第五首)

「二祖の頌」は、甚だ高偉爲り。雲の作、時に一佳語有りとも雖も、兄の作を見れば、又た貧儉家と成らんとす。當に兄に此の謙辭を致すべきに縁無く、又た雲、亦復た以て苟も自ら退かざるのみ。然れども意、故より復た之を微や多しと謂ふ。「民不輟歎」の一句は、

省くべしと謂ふ。

「二祖の頌」は、まことに立派な作品である。自分などは時々「佳語」を持つてはいるが、兄に比べると、何も持たない貧乏人になつたようだ。兄にこんな謙辭を言うべきではないし、自分も遠慮することはしないが、やはり少し長すぎるようで、「民不輟歎」の一句は、省いた方がよかる。

兄文章之高遠絶異、不可復稱言。然猶皆欲微多。但清新相接、不以此爲病耳。若復令小省、恐其妙欲不見、可復稱極。不審兄由以爲爾不。(第十一首)

兄の文章の高遠絶異なるは、復た稱言すべからず。然れども猶ほ皆な微や多からんとす。但だ清新相ひ接すれば、此を以て病と爲さざるのみ。若し復た小しく省かしめば、恐らくは、其の妙(他に)見ざるとんとし、復た極と稱すべし。兄の由は以て爾りと爲すや不やを審らかにせず。

兄の文章はこの上もなくすばらしいが、どれも少し長すぎるようだ。ただ「清新」な表現が連続しているので、缺點にはなっていないだけだ。もしもう少し短くすれば、誰もまねることのできないほど立派な作品になるであらう、と言う。

文章の長さについては、陸機自身も「文賦」の中で、「辭達して理學がらんことを要す、故に冗長を取ること無し」と、長つたらしい文章はよくない、と述べてはいる。しかし、陸機の言う「長さ」と、陸雲の言う「長さ」との間には、かなりの概念の違いがあつたように思われる。實際に陸雲の作品を見ても、賦で最も長いものは「南征賦」の七二二字であり、他の作品は、どれも五〇〇字前後のものばかりである。これに對し、例えば陸機の「文賦」は一五五〇字、また同時

代の潘岳の「西征賦」ともなると、實に四三六六字の長大な作品である。このような機・雲二人の文章の長さについては「文心雕龍」でも、「陸機は才は深を窺はんとし、辭は廣を索めんことに務む。故に思ひは能く巧に入れども、繁を制せず。士龍は朗練にして、識を以て亂を檢す。故に能く采を布くこと鮮淨にして、短篇に敏なり」(才略)と、陸機の文章は、構想は巧みであるが繁多であり、陸雲の文章は、新鮮清淨で短篇にすぐれていた、と作品の長さについて、兄弟を對照的に捉えている。

以上、見てきたように、陸雲はただ長いだけの文章には價値を認めず、短く引き締つたものを「清」なる文章として理想視していたようである。

兄に對して陸雲は、また次のようなことを言う。

兄往日文、雖多瑰鏤、至於文體、實不如今日。(第二十一首)

兄の往日の文は、瑰鏤多しと雖も、文體に至りては、實に今日に如かず。

兄の過去の文章は、「瑰鏤」つまり、きらびやかで目新しい言葉は多いのだが、文章の内容は兄の現在の作品に及ばない、と。さらに同じ書翰に、

張公文無他異、正自情省、無煩長。作文正爾、自復佳。(第二十一首)

張公の文は他異無きも、正自に情省にして煩長無し。文を作りて正に爾らば、自ら復た佳なり。

張華の文章は「情省」であつて「煩長」な所が無く、それで立派な作品たり得ているではないか、と言う。ここに言う「煩長」とは、別の書翰に、

二陸の文章觀

尋得李龍「勸封禪」草。信自有才、頗多煩長耳。(第二十七首)
尋いで李龍の「封禪を勸む」の草を得たり。信自に才有るも、頗る煩長多きのみ。

李龍の「封禪文」の草稿を手に入れた。確かに文才は有るが、かなり「煩長」な所が目につく、とあるのを参考にすれば、ごたごたと長つたらしいことを言うものと思われるが、そのような所の無い、すつきりと引き締つた文章こそ、陸雲が兄に望むものであり、同時にまた、陸雲自身が「清」なる文章と考えていたものであらう。

(2) 轉句について

また陸雲は、文章の中の轉句について、彼獨特の議論を展開している。

文中「於是」「爾乃」、於轉句誠佳、然得不用之、益快。有故不如無。又於文句中、自可不用之、便少。(第十二首)

文中に「於是」「爾乃」有るは、轉句に於いては誠に佳なるも、然れども之を用ひざるを得ば、益々快ならん。故より無きに如かざることも有り。又た文句中に於いては、自ら之を用ひざるべきときは、便ち少く。

すなわち、文の途中で「於是」「爾乃」を用いる場合、轉句の時はよいが、使わずにすめばさらによい。むしろ無い方がよい。文句中においては、用いなくてもよい場合には、あつさり省いた方がよい、と言うのである。一般に句を轉ずる場合には、「於是」「爾乃」といつた句端の辭を用いるのであるが、陸雲はそのような句端の辭をなるべく用いない方がよいと主張する。

そうして陸雲は、それを自分の作品において實踐している。實際に陸雲の作品を見ると、このような句端の辭が使われている所が、

かなり少ないことに氣付く。ことに漢代の賦などが、轉句のたびごとに「於是」「爾乃」などを用いるのに比べると、はるかに少なくなつてゐる。この點も、陸雲の主張する「清」と關連があるように思われる。句を轉ずるたびに句端の辭を用いたのでは、どうも煩雜な感じを與えてしまい、「清省」とは言えないものになつてしまふ。従つて、その使用をできるだけ少なくすることを、陸雲は主張するのであらう。

それでは陸雲は、句を轉ずる際、かかる句端の辭にかえて、どのような辭を用いようとしたのか。例えば陸雲には「南征賦」という作品があるが、幸いにもこの「南征賦」の草稿の一部と思われるものが、「與兄平原書」の第七首に見える。これは恐らく兄に添削を依頼した際に、手紙に同封されたものであらう。ところで、この「南征賦」の草稿には、轉句のために「羊腸轉時」「羊腸として時を轉じ」「元兵時」「元兵は時に」といつた句端の辭が用いられてゐるのである。陸雲は、句を轉ずるための辭として「於是」「爾乃」といつた、言つてみれば平凡なものではなく、「羊腸轉時」「元兵時」といつた、かなり特殊なものを考へていたようである。轉句の際にこのような辭を用ゐるのは極めて珍しいことで、當時の他の文人達の作品を見ても、「羊腸轉時」などのようなものは見られない。思うに、「清」なる文章を主張する陸雲ではあるが、その文章があまりにあつさりとしすぎており、味わいの乏しい單調なものになつてゐることを自覺してゐたために、「羊腸轉時」の如き特殊な轉折辭を考案したのではあるまいか。つまり、「清」に對する陸雲の認識内容は、ただ單に「清省」なるものを目指すというだけではなく、さらに別の側面があつたように思われる。

しかし、雲のこのような言ふなれば新しい試みに對して、兄の機は

同意しかねたようで、完成稿と思われる「陸士龍文集」に收める「南征賦」では、「羊腸轉時」は「爾乃」と普通のものに改められ、「元兵時」は削られてしまつてゐる。そうして陸雲の他の作品を見ても、「爾乃」「於是」「是故」「若夫」「既乃」などのような、ごく普通のものしか見當らない。恐らく「羊腸轉時」のような特殊な轉折辭は、添削の途中で兄に削られてしまつたのであらう。

轉句について陸雲は、さらに前述の文に續けて、次のように述べる。亦常云、四言轉句、以四句爲佳。(第十二首)

亦た常に云ふ、「四言の轉句は、四句を以て佳と爲す」と。

これは、賦においては四言句の場合、四句で句を轉ずるのがよい、ということであり、「四字句は四句」でまとめ、というのが陸雲の理想であつたようである。實際に陸雲の作品は、四字句は四句でまとめられており、「陸士龍文集」に收める作品(賦)を例にとつても、四言二句が七例、六句が五例、八句が一例あるだけで、他の二十七例は全て四言四句である。

陸雲はまた、四字句が二句だけになつてしまふのは「孤」であると考えていた。やはり前述の文に續けて、次のように言う。

往曾以兄「七羨」[〃]回煩手而沈哀結[〃]上、兩句爲孤。今更視定、自有不應用。時期當爾、復以爲不快。故前多有所去。(第十二首)

往曾^{かつて}兄の「七羨」の[〃]回煩手而沈哀結[〃]の上、兩句を孤と爲す。今、更めて視定するに、自ら應^{おのづか}に用ふべからざる有り。時期當^{まさか}に爾るべきも、復た以て快ならずと爲す。故に前に多く去る所有り。

兄の「七羨」の「回煩手而沈哀結」句の上は、二句が孤立しているから省いた方がよく、文章の流れからしてこの二句を使いたいであらうが、私はやはりよくないと思うので、以前からほとんどこれを削つて

きた、と言う。さらにこれに續けて、

「喜霽」『俯煩習均、弔誠重離』、此下重得如此語爲佳。思不得其韻。願兄爲益之。(第十二首)

「喜霽」の『俯煩習均、弔誠重離』、此の下、重ねて此の如き語を得ば佳と爲らん。思ふも其の韻を得ず。願はくは、兄爲に之を益せ。

と、自分の作品の「喜霽賦」も、四字句が二句だけで孤立してしまつていたので、さらに二句を加えて四句にすればよいと思うのだが、考えてみても適當な韻字が見つからないので、どうか教えてほしい、と兄に頼んでいる。しかし陸機にもふさわしい韻字が見つからなかつたらしく、「陸士龍文集」に收める「喜霽賦」のこの部分は、このままになつてゐる。考えてみるに、確かに四字句が二句という最小單位のまとまりになつてしまつと、あまりに落ち着きがなく、前後との文脈から見て變化のありすぎる文章になつてしまふ恐れがある。従つて、四字句は四句というまとまりが、最も理想的なものであつたと思われ。『清』なる文章を指す陸雲も、「四言四句」というまとまりが最適なものと考えたのである。そうしてこの「四言四句は四句」という考え方を明言したのは、恐らく陸雲が最初であり、既に劉勰が『文心雕龍』章句篇に取り上げているように、注目すべき事である。

さて、この陸雲の主張は、兄の機にも受け入れられたらしく、『陸士衡文集』に收める作品(賦)を見ると、四言二句が三例、六句が六例、八句が一例だけで、他の二十例は全て四言四句である。陸機自身も「文賦」において、「或いは言を短韻に託し、窮跡に對して孤興る。俯しては寂寞として友無く、仰いでは寥廓として承くる莫し。偏絃の獨り張れるに譬へ、清唱を含んで應ずる靡し」と、句の短いまとまりを作ると文章の中で孤立してしまい、一本の弦だけで、それに共調す

る音が無いようだ、と述べているが、これは陸雲の、四言句を二句だけ用いると文章の中で孤立してしまうという考え方と、相い通ずるもので、この點に關しては、雲の主張を入れたようである。

造句に關する陸雲の意見には、轉句の他に、對句についてのものも見られる。すなわち兄の作品をめぐつて、次のような議論が交されてゐる。

「扇賦」、腹中愈首尾。發頭一而不快。言「烏云」「龍見」、如有不體。(第八首)

「扇賦」、腹中は首尾に愈る。發頭は一なるも快ならず。「烏云」「龍見」と言ふは、體ならざる有るが如し。

「扇賦」は、主要部分は首尾の部分よりもすぐれている。書き出しはまとまつてゐるがあまりよくない。「烏云」「龍見」と言うのは、文章の態を成していないようである、と述べている。ここに言う「扇賦」とは、『陸士衡文集』卷四に收める「羽扇賦」のことで、その中ごろに、

隱九皋以鳳鳴。九皋に隠れて以て鳳鳴き
游芳田而龍見。芳田に遊びて龍見

という對句がある。書翰に言うように、恐らく上句の「鳳鳴」は、もとほ「烏云」「烏」の誤りであろうとなつていたので、陸雲に對句として適切ではないと指摘されて改めたものと思われる。確かに「龍」に對して「烏」を配したのでは、合わないようである。

以上、述べたような「四言四句」という獨特な考え方がいい、「對句」に對する配慮といい、かかる陸雲の修辭的主張は、彼の構文上の均衡感覺と「清」という文章觀とが、根柢で脈絡を持つてゐることを示すように思われる。つまり構文的に程よくバランスのとれたものを、

陸雲は「清」なるものと考えていたのであり、そうしてそれは結果的に、「美」「麗」なるものを求める當時の文壇の流れに投ずるものとなつていた。

(3) 用語について

次に、「綺語」の使用と「新奇」な表現について、それが「清」とどのように關わつているのか、二陸の意見を見てゆくことにする。

陸雲は、兄の「綺語」について次のように述べている。

「文賦」甚有辭、綺語頗多。文過多、體便欲不清。(第八首)

「文賦」は甚だ辭有るも、綺語頗る多し。文適に多ければ、體は便ち清ならざらんとす。

すなわち、「文賦」は表現は豊かであるが、「綺語」がかなり多過ぎ、「清」ではない、と言う。文章にとつて「綺語」は必要であると考えた陸雲ではあるが、先にも述べたように、文章について「清」ということを重要視する彼にとつて、兄の「文賦」は「綺語」が多過ぎたのであろう。

しかし、「綺語」によつて文章を飾り立てるとするのは、何も陸機だけに限つたことではない。『文心雕龍』に、「晉世の群才、稍や輕綺に入る(明詩)、或いは「魏・晉は淺にして綺(通變)と誇られてはいるが、當時の文壇においては「綺」の要素が貴ばれていたのは事實であり、むしろ「綺語」の多用を戒める陸雲の方が、例外的な存在であつたと言えよう。

陸雲はまた「新奇」なる語の重要性について、次のように述べている。

兄頓作爾多文、而新奇乃爾。眞令人怖、不當復道作文。(第八首)

兄は頓に作りて爾く文多く、而も新奇は乃ち爾り。眞に人をして怖

れしめ、當に復た文を作るを道ふべからず。

すなわち、兄は忽ちのうちに文章を作り、それは美しい表現にあふれ、しかも「新奇」な語が見られる。これでは私は頭が上がりなしい、もう文章を作つてゐるなんて言えない、と言う。

また別の書翰では、次のようにも言う。

作文、臨時輒自云佳、小久報、不能視。爲此故息意爾。今視所作、不謂乃極、更不自信。恐年時間、復捐棄之。徒自困苦爾。兄小加潤

色、便欲可出。極不苦作文、但無新奇、而體力甚困瘁耳。(第十六首)

文を作り、時に臨んで輒ち自ら佳なりと云ふも、小や久しくして報ずるに、視る能はず。此の爲の故に息意するのみ。今、作る所を視るに、乃ち極なりと謂はず、更に自ら信ぜず。恐らくは年時の間、復た之を捐棄されん。徒自に困苦するのみ。兄、小しく潤色を加ふれば、便ち出だすべからんと欲す。極めて文を作るに苦しまざるも、但だ新奇無くして、體力、甚だ困瘁するのみ。

文章を作つた時には、すばらしい出來榮であると思つたが、しばらくして兄に送つてのち、更めて見てみるに、とても見られたものではなく、ために書く氣がなくなつてしまふばかりだ。この作品も、つまらないとは思われないが、全く自信がない。一年そこらのうちに棄てられてしまふかもしれない。ただ苦勞するばかりである。しかし、兄に少し潤色してもらえば、世に出せるであらう。私は文章を作ることは一向に苦にならないが、ただその文章に「新奇」な語が無く、體だけが疲れてしまふ。

このように、どうも陸雲には「新奇」なる語がなかなか作れなかつたようであるが、この點こそは、兄陸機の得意とする所であつたらしい。機自身も「文賦」において、「百世の關文を收め、千載の遺韻

を採る。朝華を已に披けるに謝り、夕秀を未だ振かざるに啓く」と言
つてゐるのは、陸雲の言う「新奇」なる語について言つてゐるものと
思われる。また、『文心雕龍』では「新奇」について、「新奇とは、古
を擯けて今を競ひ、危側して詭に趣く者なり（體性）」と言つてゐるこ
とから考へて、「新奇」とは、これまで見られなかつた表現の新鮮さ
と、人々の思いもつかなかつた發想を含むことは、というほどの意味
であらう。例えば典故について言えば、陸雲が經書にもとづく言葉を
多用するのに比べ、陸機は經書が少なく、諸子や史書の語句を多く用
い、後漢や魏の作品など、新しいものを用いてゐる。

もちろん、陸機の作品にも經書をふまえた語句を多く用いてゐるも
のもあるが、他人のあまり用いない典故によつて、表現に新鮮さを出
そうとしたのであらう。陸機の典故について、劉勰は『文心雕龍』で
次のように言つてゐる。「陸機の『園葵の詩』に云ふ、『足を庇ふは同
じく智を一にし、生理は各々萬端』と。夫れ葵の能く足を衛るは、事
は鮑莊を譏り、葛藟の根を庇ふは、辭は樂豫自りす。若し葛を譬へて
葵と爲せば、則ち事を引きて謬りを爲し、庇の衛に勝ると謂へば、則
ち事を改めて眞を失ふ。斯れ又た不精の患なり。夫れ子建の明練、士
衡の沈密を以てするも、而も謬りを免れず」（事類）と。すなわち、陸
機の「園葵詩」に、

庇足同一智 足を庇ふは同じく智を一にし

生理各萬端 生理は各々萬端

という句があるが、「葵」が足もとを「衛」というのは、孔子が鮑
莊子を譏つた時のことばであり、「葛藟」が根を「庇」うというのは、
樂豫が宋の昭公を諫めた時のことばであるから、もし「葛」を譬えて
「葵」にしたのならば、典故の引き違いであるし、「庇」の方が「衛」

よりもよい考へたのならば、事實をまげてしまつたことになる。陸
機が典故の用い方に輕率であつたと批判してゐる。しかし思うに、典
故の用い方を誤つたというよりも、むしろ「新奇」を求めた陸機が、
作爲的に新しい典故の使ひ方をしたのではなからうか。従來のもの
とは違つた用い方をすることによつて、「新奇」を生み出そうとした
のではないかと思われる。

ところが陸雲の方は、

兄「園葵詩」、清工。然猶復非兄詩妙者。（第二十五首）

兄の「園葵詩」は、清工なり。然れども猶ほ復た兄の詩の妙なる者
には非ず。

と、兄の「園葵の詩」は、あか抜けのした巧みな作品ではあるが、兄
の詩の妙なるものではない、と言つてゐる。それは恐らく劉勰の指摘
してゐるような點について、言つてゐるのであらう。「典故」の用い
方に嚴格な雲と、自由な用い方をする兄機との相違點を見ることがで
きる。

さて、「新奇」について陸機自身は、「文賦」の中で、「必ず擬する
所に殊ならず、乃ち闇に曩篇に合ふことあり。予が懐に杼軸すと雖
も、佗人の我に先んずるを怵る。苟に廉を傷りて義を愆れば、亦た愛
すと雖も必ず捐つ」と、どんなに氣に入つたことばであつても、前人
と偶然に一致した場合には、残念であるが捨ててしまふ、と言つてゐ
る。前人がすでに用いてゐるからには、もはや「新奇」とは言えない
からであり、「新奇」なる語を求めてゆく陸機の姿勢を窺うことがで
きる。

ところが、「新奇」な語が多いというのは、逆に言えば、典雅な趣
に缺けるといふことになつてしまふ。陸雲もその點について、

張公昔亦云、兄新聲多之不同也。典當故爲未及。彦藏亦云爾。(第十九首)

張公も昔亦た云ふ、「兄の新聲、多くは之れ同じくせざるなり。典は當に故より未だ及ばずと爲すべし」と。彦藏も亦た爾りと云ふ。つまり、張華や彦藏が、兄の「新聲」はほとんどまねることはできないが、逆に「典」なる落ち着きに缺けており、まだまだである、と言つている、というのであるが、これは「新聲」、すなわち「新奇」なる語があまりに多過ぎて、かえつて文章がうわつたものになつてゐる點を指摘したものであらう。

以上、見てきたように、「清」なる文章を目指した陸雲は、典雅であつたりとした語を用い、句端の辭の頻用を避け、短篇に作品をまとめ上げてゆくこととする。これに對して陸機の方は、綺語を豊富に用いて文章を飾り立て、「新奇」な言葉を隨處にちりばめ、長篇の作品を作つてゆく傾向にある。このような兩者の違ひについては、『文心雕龍』においても、「士衡の才優るが如きに至つては、辭を綴ること尤も繁に、士龍は思ひ劣れども、雅り清省を好む。雲の機を論ずるに及び、蓋し其の多きを恨むも、清新相ひ接すれば、以て病と爲さず」と稱するは、蓋し友于を宗ひしのみ(銛裁)と、陸機の「繁」と陸雲の「清省」とを對照的に捉えている。

なお、陸機の文章について陸雲は、煩雜ではあるが、表現に「清新」さがあるために、缺點が補われていると、いかにも機の文章が「清新」であるかのように言うのであるが、これは劉勰の言うように、弟として兄に對する配慮があり、いくらかでも「清」なる要素があれば、それを過大に評價するところがあつたのではなからうか。先にも擧げたが、陸雲が「清工」と評している「漏賦」「園葵詩」、或いは

「清妙」と評している「述思賦」「弔蔡君」などから、そのことは窺われる。今、その中の「漏賦」を例に見てみよう。

偉聖人之制器、妙萬物而爲基。
形罔隆而弗包、理何遠而不之。

寸管俯而陰陽效其誠、尺表仰而日月與之期。

玄鳥懸而八風以情應、玉衡立而天地不能欺。

既窮神以盡化、又設漏以考時。

爾乃挈金壺以南羅、藏幽水而北載。

凝洪殺于編鍾、順卑高而爲級。

激懸泉以遠射、跨飛塗而遙集。

伏陰蟲以承波、吞恆流其如挹。

是故來象神造、去猶鬼幻。

因勢相引、乘靈自薦。

口納胃吐、水無滯咽。

形微獨瀟之緒、逝若垂天之電。

偕四時以合最、指昏明乎无駁。

籠八極于千分、度晝夜乎一箭。

抱百刻以駿浮、仰胡人而利見。

夫其立體也簡、而效績也誠。

其假物也粗、而致用也精。

積水不過一鍾、導流不過一筵。

而用天者因其敏、分地者賴其平。

微聽者假其察、貞觀者借其明。

考計歷之潛慮、測日月之幽情。

信探頤之妙術、雖無神其若靈。

以上四句、據『初學』
記、卷二十五引而補

以上三句、據『初學』
記、卷二十五引而補

以上三句、據『初學』
記、卷二十五引而補

磨蟾餘之樓月、識金水之相緣。以上二句、陸雲文選（『藝文類聚』卷六十八）
これは作品の一部であろうが、この部分を見る限りにおいて、六字句を基調にして、途中、九字句、四字句、五字句によつて變化をつけてはいるが、字句数の目まぐるしい變化は見られない。また使われている句端の辭も、「爾乃」「是故」の二つだけであるし、「綺語」と思われるものも「新奇」なる表現も目につかない。このような點を陸雲は、「清工」と評しているのであろう。

以上、「清」を中心に、主に文章の表現面における二陸の文章觀を見てきたが、次に、内容面に關わる「情」ということについて、兩者の考えを見てゆくことにする。

二

陸雲には、「九愍」という作品がある。その序に、「昔、屈原、放逐せられて『離騷』の辭興る。今より古に及ぶまで、文雅の士、其の情を以て、其の辭を遊び、意ひを表さざるは莫し。遂に作者の末を則ぎて『九愍』を述ぶ」と言うように、この「九愍」は、屈原の意を繼ぐものであり、特に『楚辭』の「九章」に倣つて作られたものである。ところで、この「九愍」の添削をめぐつての議論が展開されているのが、次の書翰である。

雲再拜。誨「九愍」如所勅、此自未定、然雲意自謂、「故當是近所作上近者」。意又謂、「其與漁父相見以下盡篇爲佳」。謂兄必許此條。而淵弦意、呼作脫可行耳。至兄唯以此爲快。不知雲論文、何以當與兄意、作如此異。此是情文、但本少情、而頗能作汎說耳。又見作「九」者、多不祖宗原意、而自作一家說。唯兄說、「與漁父相見、又不大委曲盡其意」。雲以原流放、唯見此一人、當爲致其義。深自謂

佳。願兄可試更視與漁父相見時。語亦無他異、附情而言、恐此故勝淵弦。兄意所謂不善、願疏勅其處緒。亦欲成之令出、意莫更感如惡所在。以兄文、雲猶時有所能得言。雲前後所作、謹啓。（第二千首）
雲再拜。「九愍」を誨へて勅す所の如きは、此れ自ら未だ定せざるも、然れども雲の意自ら謂へらく、「故より當に是れ近ごろ作る所の上近なる者」と。意に又た謂へらく、「其の漁父と相ひ見る以下の盡篇は佳爲り」と。兄、必ず此の條を許めんと謂ふ。而るに淵弦の意、呼びて脱して行ふべしと作すのみ。兄に至りては唯だ此を以て快と爲すのみ。雲の文を論ずるや、何を以て當に兄の意と、此の如き異を作すかを知らず。此れは是れ情文なるも、但だ本より情少なくして、頗る能く汎說を作すのみ。又た「九」を作る者を見るに、多く原の意を祖宗とせずして、自ら一家の説を作す。唯だ兄は、「漁父と相ひ見るは、又大いには委曲に其の意を盡くさず」と説くのみ。雲は原の流放せられて、唯だ此の一人を見るのみを以て、當に其の義を致すと爲すべし。深かく佳と謂ふ。願はくは、兄、試みに漁父と相ひ見る時を更視すべけんことを。語に亦た他異無きも、情を附して言ひたれば、恐らくは此れ故より淵弦に勝らん。兄の意、善からずと謂ふ所、願はくは、其の處緒を疏勅せんことを。亦た之を成して出ださしめんと欲するも、意に更に惡の在る所の如きを感じずる莫し。兄の文を以てすら、雲猶ほ時に能く言ふを得る所有り。雲の前後して作る所をや。謹啓。

これによると、陸雲は、自分の作品はよくできており、特に「漁父と相ひ見る」こと以下、一篇の終りまでがよいできだと思ふ、と言う。すなわち陸雲は、漁父と出合うことを言うことによつて、この文章に「情」を込めようとしたのである。ところが兄の方はこれに反對で、

淵弦の言うように、「漁父と相ひ見る」ことを省いた方がよい、と考えていた。ただ陸雲は、近ごろの「九」の作者は、屈原の意を祖宗とせず、勝手に一家の説を成しており、自分の作品の「漁父と相ひ見る」ことこそが、屈原の意を祖宗として「情」を込めたものである、と主張する。「情」とは、その作品の主題について作者の懐いている心情、人物についての心情を言うのであろうが、この「情」を作品にどのようにして盛り込むかに關して、兄弟の意見が全く食い違つてゐる。

陸雲は別の書翰でも、次のように述べている。

「九愍」如兄所誨、亦殊過望。雲意自謂當不如三賦。情難。非體中所長。欲徧周流、雲意亦謂爲佳耳。然不云其愈於與漁父。(第十七首)

「九愍」、兄の誨ふる所の如きは、亦た殊に望みに過ぐ。雲の意、自ら謂へらく、當に三賦に如かざるべしと。情は難し。體中の長ずる所に非ず。徧く周流せんとするは、雲の意、亦た佳と爲すと謂ふのみ。然れども其れ「漁父と」より愈るとは云はず。

つまり、「情」は本當に難しく、自分の得意とする所ではないが、兄が「徧ねく周流せんとす」ることだけを言い、「漁父と出合う」ことを出さない方がよいとするのは、それはそれでよいとは思ふが、やはり「漁父と(相ひ見る)」ことを言う方が、よりすぐれていると思う、と言うのである。陸雲はあくまでも、「漁父と相ひ見る」という事柄を述べることによつて、屈原に對する心情を表現しようとするのであるが、兄の方は、そのような事柄を言わなくても、語句や表現の工夫によつて、文章に「情」を盛り込むことができると思つたのであろう。このように、兄弟の間で添削が繰り返されて出來上がった「九愍」であるが、陸雲は自分の意見を押し通したと見え、「陸士龍文集」所收

のものは、「遇漁父之戻止、與讒言而來想(漁父の戻止するに遇ひ、讒言を興して來たり想ふ)云々」のようになつており、漁父との出合いを述べている。

陸雲が「情言」すなわち、心情のこもつた言葉が苦手であつたことは、次の書翰によつてもわかる。

情言深至、述思自難希。(第十八首)

情言深至なれば、思ひを述ぶること自ら希ひ難し。

あまりに心情のこもつた言葉ばかりを連ねると、自分の思想をそのままに述べることは難しくなるように思われる、と。

しかし陸雲は、自分の不得手な「情言」を、何とか自分の文章にも取り込んでゆこうとする努力も一方ではしている。

往日論文、先辭而後情、尙絮而不取悅澤。嘗憶兄道張公父子論文、實自欲得。今日便欲宗其言。(第十一首)

往日、文を論ずるや、辭を先にして情を後にし、絮を尙びて悦澤を取らず。嘗に憶ふ、兄の張公父子の文を論ずるは、實自に得んと欲すと道ふを。今日、便ち其の言を宗べんと欲す。

以前は「辭」つまり表現の方を先にして、「情」は後回しにしていたが、兄が張華らの文章論を話すのを聞いて、その考えを改めた、と言う。この陸雲の「情」への志向は、當時の張華をはじめとする西晉太康期の文壇の趨勢が、已に「情」の方向へと動いていたことを暗示するものであるが、しかし陸雲は、その文壇の趨勢に乗ることが出來なかつたのではなからうか。その理由として、一つには雲の文才不足ということが考えられるが、彼は本來的に「情」の表現が苦手であつたということが大きな理由であると思われる。言うまでもなく、適度な「情」は文章には缺くことのできない要素である。『文心雕龍』にも、

「情の爲にする者は、要約にして眞を寫し、文の爲にする者は、淫麗にして濫に煩ふ。」(情采)と、自分の心情を表現するための文章は、簡潔でよく眞實を寫しているが、美文のための文章は、華美にすぎず眞實を失つてしまふ、と言つてゐる。このことは陸雲自身も感じていたようで、先にも擧げたように、

此是情文、但本少情、而頗能作汎説耳。(第二十首)

これは是れ情文なるも、但だ本より情少なくして、頗る能く汎説を作すのみ。

「九」體の文章は、感情を込めて書かねばならないが、自分はもともと情が少なく、こたごたと餘分な言葉並べたててゐるにすぎない、と言つてゐる。雲の志す「清省」なる文章は、「情言」を適度に用いることによつて、更に理想的なものになつたのであろうが、しかし陸雲には、その能力の缺如と、本質的に「情」の表現が苦手であるために、それが出来なかつた。むしろ陸雲から言わせれば、兄のように「情言」を多く用いたのでは、それは用い過ぎなのであり、文章に「情」がこもり過ぎることになり、雲の目指す「清」なる文章とは、遠く懸け離れた「繁」なる文章になつてしまつてゐるよう思われたのであろう。「情言」を用いる、その程度が問題なのである。ここにも「情言」を豊富に用いることによつて、文章に潤いを持たせようとする陸機と、それが苦手であるために、内容とする事柄を通して文章に「情」を込めようとする陸雲との、對立點を見ることが出来る。

三

以上、「清」と「情」を中心に述べてきたが、そこに見られる陸機・陸雲の文章觀を比較してみるに、「新奇」なる語や「綺語」を用いて

文章を飾り、「情言」を豊富に用いて文章に自分の心情を盛り込んでゆく、いわば天才的な長篇作家である陸機と、典雅であつさりとした語を用い、常に細かな點に氣を配り、苦心しながら筆を進めてゆく短篇作家である陸雲との、文章觀の違いがはつきりと表われているように思われる。

ところで、このように陸雲の文章は、派手さを押えた地味なものとなつてゐるが、しかし彼にはまた、そのような自己の文章に變化を持たせるために新しい工夫を凝らすところもあつた。そのことを物語つてゐるのが、陸雲の「南征賦」の草稿の一部である。

②爾乃使熊羆之士、城闕之將。

雄聲泉涌、逸氣風亮。

超三軍以奔厲、賈餘勇以成壯。

兆洪音於寂寞、先無聲而高唱。

③元兵時、紛若屯雲、煥若積波。

授教斯謐、靜言勿譁。

「嚴鼓隱其雲戒、萬夫翕而威和。

治安步以止立、應金奏而靡戈。

進總干以乘言、退揮旅而星羅。

④禮既畢、歸旅將振。

尋繁員轉、因瀕蓋旋。

若疾流之繞駿沈、驚颯之靡狂塵。」

①羊腸轉時、命屏翳以夕降、式飛廉而朝興。

涂蒙雨而後清、景帶天而先澄。

陪峻臣於彫輅、列名僚於後乘。

猛將起而虎嘯、商風肅其來應。

士憑勢而響駭、馬嘯天而景凌。

この「南征賦」の草稿の一部は、この部分だけの構成を見ると、②戦いの前の様子 ③進軍と戦いの様子 ④戦いが終つて歸る時の様子 ⑤次の戦いへと向かう様子（或いは歸還の様子を更めて述べたものともとれるが）といつた四つの場面から構成されている。ところが、兄の添削の手を経たと思われる「陸士龍文集」に収める完成稿では、④の部分が②の前に置かれ、出陣の様子を述べたものとなつており、その後「臨川屯於廣陸、武騎被乎中陵」という二句が加えられ、次の出陣の儀式が行われる場面へと、見事につながれている。さらにその後「類禡比京、師徒經始」で始まる五十二句が加えられ、進軍と戦いの様子が述べられた後、草稿の②の部分へと續くのである。従つて草稿の⑥の部分の「嚴鼓隱其雲戒」から⑥の終り「驚颯之靡狂塵」までの部分は、完成稿ではすつかり削除されている。その理由を考えてみるに、草稿のようにいつたん歸還しかけて、その後いろいろな事があつて再び進軍という複雑な筋立てのために、この部分が二元的に分裂せざるを得なくなつてしまつてゐる點を改めようとして、陸機は完成稿のように文章構成を変えたのであろう。また、句端の辭について言えば、完成稿では⑥の「元兵時」は削られてしまい、①の「羊腸轉時」は「爾乃」と普通のものに改められている。このような、草稿に見られる複雑な文章構成といい、「羊腸轉時」の如き特殊な轉折辭といい、それは我々の目から見ても奇異に感じられ、また同時に陸雲の文才の不足を露呈しているようにも思われる。そうしてこのような文才の缺如が、彼をして當時の文壇の流れに乗れしめず、「清省」を強調し、短篇作家に向かひしめた理由の一つとも考えられる。しかし雲には、彼なりの意圖があつたに違ひない。恐らく陸雲は、自分の文章

の單調さを破るために、従来の文章構成とは異なつた文章構成を企て、さらにはこれまで見られなかつたような句端の辭を考案したのであろう。しかし陸機は、雲のこのような新しい試みをしりぞけてゐる。『晉書』の陸機の本傳に、「儒術を伏膺し、禮に非ざれば動かさず」とあるように、陸機はただ「新」しさを追求するだけではなく、その根柢には、従来の傳統的な文章觀を持つていたように思われる。新しさを追求する反面、古めかしい所を持つてゐる陸機、古典的でありながら、一面、新しさを求めんとする陸雲、兩者の文章觀には、このようないずれもあつたようである。

しかし、二陸のこの文章觀の違いは、兩者にとつてかえつて好都合だつたのではなからうか。新しい發想、新しい表現を次々と取り込み、それが度を過してしまふような陸機の文章に、齒止めをかけるのが陸雲であり、あつさりとしすぎて味わいの乏しい陸雲の文章に、潤色するのが陸機であり、兩者が互いに文章を添削し合うことによつて、よりすばらしい文章が生み出されることになつたのであろう。

さて、以上の如く對立點の多い二人ではあるが、どうしても見逃すことのできないのは、二陸と『楚辭』の關係である。先にも挙げたが、陸雲は次のように言つてゐる。

又見作「九」者、多不祖宗原意、而自作一家說。(第二十首)

又た「九」を作る者を見るに、多く原の意を祖宗とせずして、自ら一家の説を作す。

ここには陸雲の、『楚辭』の正統を繼ぐ者としての自負を見ることが出来る。また別の『楚辭』を論じた書翰では、兄に對して次のように言つてゐる。

思兄常欲其作詩文、獨未作此曹語。若消息小往、願兄可試作之。兄

復不作者、恐此文獨單行千載間。(第十三首)

思ふに兄は常に其の詩文を作らんと欲するも、獨り未だ此曹の語を作らざるのみ。若し消息小しく往かば、願はくは、兄、試みに之を作るべけんことを。兄、復た作らずんば、恐らくは此の文、獨單り千載の間に行はれん。

兄は「此曹の語」すなわち「楚辭」風の文章だけはまだ作っていない。もし兄が作らねば、「楚辭」だけが千載の間に行われるであろう、と言ふ。陸雲はさらに、兄を「楚辭」の後繼者と見ていた。

また、陸機の押韻について「文心雕龍」では、次のように述べている。「又た詩人の韻を綜ふるは、率ね清切多し。『楚辭』は辭楚なり。故に訛韻實に繁たり。張華の韻を論するに及び、士衡は楚多しと謂ふ。『文賦』も亦た稱す、楚と知るも易へすと。靈均の聲餘を衡み、黃鐘の正響を失すと謂ふべきなり」(聲律)と。ここに張華が陸機の韻は「楚」すなわち、南方楚地の音韻が多いと述べたというのは、「與兄平原書」に、

張公語雲云、「兄文故自楚、須作文、爲思昔所識文」。(第十五首)

張公、雲に語りて云く、「兄の文は故自り楚なれば、須らく文を作るには、爲に昔識す所の文を思ふべし」と。

と言つているのによる。このように張華や劉勰によつて、その音が「楚」であると評される陸機ではあるが、彼自身は、そのことをあまり気にしていないようである。恐らく陸機にも、自分こそが「楚辭」の流れを繼ぐ者であるという自負があり、韻についても、その楚音を「文心雕龍」が指摘するような「訛」つたものとは思つていなかったのではなからうか。「その音が『楚』であるが、私は改めない」と、陸機に言わたのも、そのためであろうと思われる。

これらのことから見て、二陸の文章観には「楚辭」が大きく影響しているであろうことがわかるが、さらに「楚辭」の後を繼ぐ者としての共通の意識は、相異なる文章観を持ちながらも、相互批評を通して、文章制作に勵むことができた理由の一つであろうということが考えられる。

また、これまで述べてきたような二陸の文章観を、晉代文學の中で見るならば、西晉大康期の文壇の時流に乗り、その中心的存在となつていつた陸機と、その流れに乗りきれず、むしろ流れに逆行した陸雲、とこの二人を捉えることもできよう。さらに、六朝文學批評史における二陸の占める位置を見た場合、兄機がその「文賦」の中で展開する文學論が大きく取り上げられているのに比べ、雲のそれは從來あまり顧みられることがないが、しかし、雲の文學主張、殊に「與兄平原書」に見られるような彼獨特の文學論は、大いに注目する必要があると思われる。なぜなら北方文人の中にあつて、常に周圍の目を意識し、それへの對處に神經をすり減らしていたであろう陸機が、唯一、心を開いて文學を語り合ひ、批評し合うことのできたのは、陸雲だつたからであり、従つて雲の文學主張は、兄機にも多大な影響を及ぼしているに違いないからである。これら二陸と「楚辭」の關係、さらに晉代文學の中における二陸の占める位置については、次の課題である「北方文人に對する二陸の意識」を検討する際に、併せて考察することにしたい。

終りになつたが、小論を成すに當り岡村繁博士から貴重な御教示を賜つたことに感謝する。

注(1) この「與兄平原書」は、その口語表現の多用からわかるように、極めて親しい立場にある兄に對して、打ちとけた気持ちで書かれたものである。故に、兩者の文學主張をより具體的に知ることのできる貴重な資料である。森野繁夫「六朝漢語の研究——陸雲『平原に與うる書』の場合——」(廣島大學教育學部紀要「第二十八號」) 参照。

(2) テキストは四部叢刊本「陸士龍文集」を用い、疑問の箇所がある場合は、「全晉文」に收める「與兄平原書」に據つて、これを改訂した。

(3) 林田愼之助氏はこの部分を、「詩文の制作が多いことは自分の家に澤山豚を飼つていることと同じで自慢にならぬ」と陸機の多才を揶揄している。「魏晉南朝文學に占める張華の座標」(「日本中國學會報」第十七集)と解される。

(4) 興膳宏氏が、「また陸雲も『四言詩』の換韻は、四句ごとにするのがよい」と言う(『文心雕龍』筑摩書房「世界古典文學全集」)とされるのははじめ、従來この部分は「詩」についてのものと解されているが、これは文章(賦)についての意見であつて、「詩」についてのことではない。(5) ただ「陸士龍文集」に收める「喜霽賦」では、「頌」を「順」に、「均」を「坎」に、「甲誠」を「仰熾」に作る。

(6) 『文心雕龍』章句篇に「昔魏武論賦、嫌於積韻、而善於資代。陸雲亦稱、四言轉句、以四句爲佳」とある。

(7) 高橋和巳氏は、「鳥を言いて龍見れると言ふは、體ざる有るが如し」と解し、「羽扇賦」の「彼凌霄之遠鳥。採鮮輝之荷荷。隱九皋以鳳鳴、游芳田而龍見。」の「鳥」と「龍見」を指すとされるようである(陸機の傳記とその文學「中國文學報」第十一・十二冊)が、對句であるから「鳳鳴」と「龍見」との箇所を指すと解した方がよからう。

(8) 釜谷武志氏はこの部分を、「獨創性が無いと、全體がダイナミックな力感に缺けてしまつて、衰憊しきつたものになるのである」(『陸雲』「兄への書簡」——その文學論的考察——、「中國文學報」第二十八冊)と

解される。

(9) 小尾郊一「陸機の文賦の意圖するもの」(「廣島大學文學部紀要」第二十八卷) 参照。

(10) この句、『文心雕龍』は「生理合異端」に作るが、今、『藝文類聚』卷八十二に引く「園葵詩」に據つて「生理各異端」に改めた。

(11) 『左氏傳』成公十七年に「仲尼曰、鮑莊子之知不如葵。葵猶能御其足」とある。

(12) 『左氏傳』文公七年に「昭公將去羣公子。樂豫曰、不可。公族公室之枝葉也。若去之、則本根无所庇蔭矣。葛藟猶能庇其本根。故君子以爲比。況國君乎」とある。

(13) 『與兄平原書』に「兄文章高遠絕異、不可復稱言、然猶皆欲微多。但清新相接、不以此爲病耳」(第十一首)とあるのによる。

(14) 『藝文類聚』卷六十八に引く、陸機の「漏刻賦」を指すものと思われる。

(15) 『文心雕龍』にもここを取り上げ、「又陸雲自稱、往日論文、先辭而後情、尚勢而不取悅澤。及張公論文、則欲索其言」(定勢)と、「勢」を「勢」に作る。「定勢」篇の引用であるだけに問題はあがあるが、今、本集に従い「絮」のまま読んでおく。

(16) ただ削除されてしまつた部分の最後の二句は、完成稿では、

絶信寂其既收

嚴鼓隱其雲收	萬夫翕而咸和
萬夫翕而咸和	嚴鼓隱而重收
嚴鼓隱而重收	景燧離而星羅

の如く、四句に増添されている。